虚妄の成果主義：日本型年功制復活のススメ

高橋伸夫著　日経BP社（発行）
日経BP出版センター（発売）　2004

経営学部准教授　福原 康司

「成果に見合った給料をもらうべきだ」。この至極当然な考え方に対して、著者は経営学の諸理論を用いながら異を唱える。真の国際化とは、他国の文化や風習を理解することで、実は自国の良さを再確認することでもあるが、本書は日本企業の安易な欧米化に警笛を鳴らし、日本的経営の良さを鋭く指摘しているのである。そのエッセンスは、次の2点だ。すなわち、大概の仕事は独りで成し遂げることなどできないし、仮に独りで達成できたとしてもそれは大した仕事ではない。したがって、仕事の成果に対する報酬を個人に還元することは大きな間違いである。そして、個人主義を助長する成果主義ではなく、人々が自分の所属している組織の未来のために、人材育成や知識共有などの先行投資を惜しまない誘因を持っている日本的経営は、すこぶる合理的な経営システムである。

一見するともっともらしく思える事象に対して、その本質的な意義を見抜く眼を養うのが大学での学習である。理論が散りばめられているとは言え、初学者にも平易な文章で書かれている本書が、そうした眼力を体得するきっかけになればと思う。

竜馬がゆく　1～8

司馬遼太郎著　新装版　文藝春秋　1998（文春文庫）

商学部教授　宮脇 正孝

本にはぜひとも若いうちに読んでおくべきものがある。読めばその後の人生にきっとプラスになるからだ。これはまさにそんな本である。

NHK大河ドラマ「龍馬伝」が何かと話題になっているが、坂本龍馬と言えば、何と言っても司馬遼太郎の『竜馬がゆく』だ。

土佐藩の下級武士の家に生まれ、子供の頃はいじめられっ子で、15歳くらいまで寝小便をしていたという竜馬。それが幕末の風雲の中で成長し、薩長連合、大政奉還を実現し、やがては倒幕、明治維新へと至る歴史の扉を押し開けてゆく。

竜馬は人まねが大嫌いだ。曰く、「人生は一場の芝居だというが、芝居とちがう点が、大きくある。芝居の役者のばあいは、舞台は他人が作ってくれる。なまの人生は、自分で、自分のがらに適う舞台をこつこつ作って、そのうえで芝居をするのだ。他人が舞台を作ってくれやせぬ」。どう生きるかは自分で決める。人と違うことを恐れてはいけないのである。

竜馬の回りにはいつも爽やかな風が吹き抜けているようだ。その明るく、大らかな人柄には、誰もが魅せられてしまう。女から見ても、男から見ても、とにかくカッコイイのである。

この本の読後感も爽やかで、きっと元気が出るだろう。一度限りの人生、一丁やっちゃろうかい、という気になるはずだ。私も久しぶりに読み返して、ちょっと若返ったような気になっている。